

第 48 回日本母性衛生学会

演題名： 0 歳児に対する母親の寝かしつけ方略について(2)-素手抱っこと子守帯抱っこの比較-

発表者：山下泰子、黒石純子、斉藤哲(ピジョン株式会社 常総研究所)

抄録本文:

【目的】

0 歳児を寝かしつける場面において、母親が乳児に対して行う寝かしつけ方略の一つである“抱っこ”についての詳細を明らかにすることを本研究における目的とした。

【方法】

対象：P 社モニター制度に登録している母親 3 名、母親の平均年齢 32 歳、平均身長 156cm(範囲：151~165)乳児の平均月齢 9 ヶ月(範囲：8~10)、観察時の児の平均体重 8985g(SD=178)。
手順：家庭訪問により、普段使用中の子守帯を用いた抱っこと素手での抱っこの様子を観察し、側部ならびに頭頂部よりビデオカメラ撮影を実施した。倫理的配慮として事前に研究目的等を説明し、母親から文書同意を得た。

【結果・考察】

観察記録を視認により質的分析をした結果、素手抱っこでは、母親は主に児の尻・腰部を両腕で支え、児は上半身が自由に動ける状態であったため、子守帯を使用した場合よりも母子の身体は密着度が低かった。子守帯を使用した抱っこでは、児が子守帯によって頸部まで姿勢を固定されているため、母子の密着度が高く、児も素手抱っこ時より落ち着いた様子が見られた。これより、乳児の胸部が母親の身体と密着していることが、児が落ち着くために必要な要因であると推測できた。今後子どもの月齢を考慮し、実際に児を寝かしつける場面において密着度が児の落ち着きにどのような影響を与えるのか、詳しく検討していく予定である。